

南沙艦隊殲滅 下



大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の  (次ページ) をクリックするか、キーボード上の  キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

挿
画
安
田
忠
幸

目次

第九章	異次元からの亡霊	9
第十章	超弩級戦艦	36
第十一章	死刑囚	63
第十二章	ゼロ・エリア	93
第十三章	緊急支援降下猟兵	119
第十四章	核攻撃	145
第十五章	イベント・ホライズン	171
第十六章	ユリイカ	195
エピローグ		214

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 二佐。傍若無人の上司、同期と離れたつもりだったが、相変わらずの日々を送ることに。コードネーム：モンブラン。

原田小隊

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 二曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 二曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口苾太 三曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 士長。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき
吾妻大樹 士長。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

姜小隊

かんあやか
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 二曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

みどうそうま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

いいかける
井伊翔 二曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

あねこうじ きねあつ
姉小路実篤 三曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：

ボーンズ。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：
ニードル。

あかばねたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：
シェフ。

おだぎりしろう
小田桐将 一士。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：
ダック。

しばひかる
司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官に異動となった。

〔海上自衛隊〕

第一護衛隊群

てづかあきら
手塚憲 海将補。第一護衛隊群司令。

おのでらみのる
小野寺稔 一佐。護衛隊群首席幕僚。

《防衛省》

しみずりょう
志水亮 一佐。分析課長。

いまいずみまいか
今泉舞華 三佐。志水の部下。

〈大学所属〉

らもんまさむね
羅門正宗 准教授。サイコップの日本側代表者。専門は、リモートセンシング。

中国

〈中南海〉

トゥアンリイシオン
段立新 弁公室長。

イェン アビン
嚴亜平 少将。海軍情報分析部。

〈駐日中国大使館〉

チンヨンコ
金永革 中国大使。

〈マニラ中国大使館〉

ツァイイ
蔡一 中佐。中国大使館付き武官。普段は陽気な男。

《海軍》

パンクアンイン
潘冠英 中将。南海艦隊司令官。米留組の一人。尹宏大海軍少将と

は時々英語で冗談を交わす仲。

インホンタマ
尹宏大 海軍少将。中国海軍南海艦隊参謀長。英国大使館で武官経験がある。

ホフシアオ
賀孝 少将。艦隊の政治将校団を束ねる。

チンイーチ
秦一智 大佐。作戦参謀。

〈海軍陸戦隊〉

シュイユンフエイ
許云飞 中佐。

リンフオンチイア
林聰健 少佐。副隊長。

ワンピンピン
王冰冰 大尉。艦隊司令部付き。上陸作戦への同行を命じられた。アメリカ海兵隊の研究をしている。

ウェイタンタン
章丹丹 少尉。機関部。艦の女性乗組員区画で王冰冰大尉と同室。

《陸軍》

[第 15 空挺軍団]

シェンチョウファン
沈卓凡 中佐。第 15 空挺軍団・特殊作戦中隊を率いる。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

〈C I A〉

レネー・フォイルナー 物理学者。専門は量子力学。C I Aにおける、サイコップの責任者。

//// 日本 //////////////////////////////////////

〈連合戦隊〉

ヤマモトシヨウゾウ
山本尚造 少将。南遣戦隊司令官。長州閥。

タナカフイチ
田中武弼 大佐。“大和”艦長。

イチジハヤト
伊地知隼人 大佐。連合戦隊作戦参謀。薩摩閥。

キムチヨオン
金主永 中佐。連合戦隊作戦参謀部副長。

キムラヤスコ
木村康子 技術少佐。

アカまつはじめ
赤松肇 軍曹。特殊部隊。海軍陸戦隊を率いる。

リノミン
李盧民 伍長。メデイック。

カクラサくらこ
神楽桜子 伍長。伊地知隼人大佐の従兵。

ミヤもとまさはる
宮本雅晴 博士。海軍顧問。理論物理学者。

南沙艦隊殲滅

下

第九章 異次元からの亡霊

南沙諸島、ミスチーフ礁（美濟礁）の中国軍施設破壊に端を發した危機は、謎の敵による中国海軍軍艦の破壊を経て、その報復として中国軍がセカンド・トーマス礁（仁愛礁）への攻撃を行った。しかしそれは空振りに終わったばかりか、自軍から發射したミサイルが、なぜか自分たちの軍艦へ向かってくるといふ、南海艦隊にとっては致命的な打撃を受ける結果となっていた。

たまたまその海域に居合わせ、中国海軍の攻撃の的になった海上自衛隊の護衛艦部隊は、辛うじて難を逃れたものの、危機は次のフェーズへと移行する。

ミスチーフ礁に続いて、スピ礁（渚碧礁）の中国軍基地が攻撃されたのだ。

さらには、その近くにあるフィリピンが領有するバグアサ島に上陸した中国軍部隊に対し、遂に謎の敵が正体を現した。

高度なステルス技術で偽装した敵——謎のフィリピン兵部隊は、あつという間に中国兵を駆逐すると、中国軍に対して、この南沙海域から去るよう最後通牒を突き付けた。

その現場に向かい、謎の敵との接触を試みた日本は、バグアサ島に上陸する寸前、日本人の遠い

記憶に潜む《亡霊》から、歓迎を受けた。

この《亡霊》とは、七〇年以上も昔に東シナ海に沈んだはずの超弩級戦艦「大和」だった。

陸上自衛隊西方普連の格闘技教官兼北京語講師の司馬光二佐は、〈特殊部隊サイレント・コア〉姜小隊を率いる姜彩夏三佐とともに、女性乗組員区画に案内され、階級章付きの着替えを手渡されていた。

階級章といっても、あちら側の階級章だったが。シャワールームには、日本製の化粧品が一通り揃っていた。司馬は、それらを一つ一つ手に取りながら「こちら側で買ったの？」と自分たちを案内してきた神楽桜子伍長に尋ねる。

「はい。それは沖繩に上陸した時、購入しました」

「あちら側のものに比べて、どうかしら？」

「別に、変わりません。デザインやメーカー名が、微妙に違う程度です」

「あの、あちら側って、どこのことですか？」

姜三佐が司馬と神楽双方に尋ねた。

「自分は、それを話す立場にないので、大佐からお聞きください」

「乗組員は全員、状況を理解しているのかしら」

「ええ、任務ですから。最初はちよっと怯えましたが。でも、何回か行き来している間に、馴れました」

「女性の乗組員は、どのくらい？」

「全乗組員の一割はいるはずですから、今は五〇名前後だと思います。最上級では、砲雷長が女性です。女性の艦長も、誕生しています」

「良い世の中なの？」

「はい。でも、この世界も楽しいですね。いつも発見があつて、驚いています。……日本が、未だにアメリカの属国状態なのは、悔しいですが」

「でも、そちらもアメリカとはそこそこうまくい

っているんでしょう？ 艦内表示が、漢字と英語の併記みたいだし」

「ええ、大国同士ということで、金持ち喧嘩せずと言いますか……」

司馬と姜が着替えている間、連合戦隊作戦参謀と名乗った伊地知隼人大佐は、CIAにおけるサイコップの責任者のレネー・フォイルナー博士と、同じくサイコップ日本側代表者である羅門正宗准教授を艦橋下のゲストルームに案内して着替えさせた。

二人とも、海水を浴びてずぶ濡れだったからだ。そこは、豪華な内装の部屋だった。アンティークのテーブルと椅子に、壁には昔の海戦を描いたレリーフがかかっている。

「このレリーフは、何の海戦を描いたものですか？ 日本海海戦ではなさそうですね」

羅門が興味津々といった様子で聞く。

「ああ、これは、イギリス海軍から寄贈されたレリーフで、トラファルガー海戦を描いている。本艦は、セレモニーで使用されることが多いので、内装はシックなデザインで統一しているんです」

「そうなんです。……大佐、今気付いたのですが、外来語が普通に出てくるんですね」

次に、フォイルナー博士が訊いた。

「良いポイントです。フォイルナー博士！ われわれはこのアジアに日本語を普及させようと、様々な形で努力したが、いかんせん日本語は難しすぎた。ひらがなにカタカナに漢字。結局は、誰でも習得が容易な英語を受け入れるしかなかった。あちら側でも、ハリウッド映画は大人気なんですよ」

「日米関係は、うまくいっているんですね」

「ええ。今は全くの対等な関係です。アメリカに

とつては、大西洋の米英同盟と同様に、日米同盟は機能している。こちら世界の修羅場しゅらばを見るにつけ、われわれは恵めぐまれていていると思う。幸運でもあった」

「……もしかして、日米間に、戦争はなかった？」

「はい。すんでのところで回避かいされました。あれが、こちら側とあちら側の分水嶺ぶんすいりょうになりましたな」

女性士官区画から司馬らが上がってくるのを、フォイルナー博士らは司令公室へと移動して待った。

壁際のモニターに、艦速や針路が表示されている。艦は、時速三ノットで北東へ進んでいた。

その他、壁には海軍提督の肖像画が一〇枚ほどずらりと飾られている。一番左端にあるのが、山本やまもと五十六大將だということは二人にもわかった。

その後、司馬と姜が入ってきて、彼らの隣に腰

を下ろした。彼女らはあちら側の階級章が付いたつなぎの服を着ている。

神楽伍長が人数分のコーヒーを淹いれると、インターカムを取ってブリッジを呼び出し、現在客人をおもてなし中であることを伝えた。

「間もなく、海軍陸戦隊の収容が終わる。本艦には一個中隊の海軍陸戦隊が乗っているが、バグアサ島に上陸したのは、ほんの一個分隊。敵はたぶん、二個中隊規模が上陸してきたと勘違いしただろうが、ホログラム兵士で騙してやった」

四人の向かいに座る伊地知が愉快げに話す。

四人がコーヒーカップに口を付けていると、真っ白な海軍制服に身を包んだ男二人と、私服姿の男が一人、部屋に入ってきた。

立ち上がった司馬らに対し、伊地知大佐が三人を紹介する。

「南遣戦隊司令官の山本尚造やまもと しょうぞう少将に、大和艦長

の田中武式大佐、海軍顧問の宮本雅晴博士です」

正面の中央に山本提督、その左隣に伊地知、宮本は、分厚いファイルを開きながら、山本の右隣に座る。

宮本博士は、ぱつと見たところ日本人のようだが、クォーターくらいで白人の遺伝子が入っている顔立ちをしていた。まずは、山本が口を開く。

「お待たせしたかな。できれば、皆さんとの接触は避けたかったのだが、このような機会をもてたのも、何かの縁でしょう。何かからお話すればいいかな？ 大佐は、事情を話したのかね」

「いえ、玉手箱を開ける瞬間に、皆さん立ち会いたいだろうと思ひまして。ただ、だいたいのは事情は察している様子ですが」

「別に隠すことはない。何でも聞いてください」
山本提督は、司馬とフォイルナーの顔を交互に見た。

「自分には理解できる話とも思えないので、フォイルナー博士に譲ります」

そう言った司馬は、さつさとフォイルナーの方へ発言権を譲った。

「……では、まず皆さんがいらした世界とは、いつの、どこにあるのでしょうか？ 一九四一年の日本からきたとも思えません、お聞かせいただけますか？」

「ええ。本艦は、二週間前に母港である呉を出港しました。本艦は、平素は連合戦隊旗艦として港に繋がれています。もっとも最近では、指揮通信機能の限界から、もっぱら指揮揚陸艦の『大淀』に司令部が乗っていることが多いが。何しろ、本艦は見栄えが非常に良いので、海軍力の誇示にはもってこいだ。艦齢は当然七〇年を優に超えているが。最後の大修はいつだったかな、伊地知君？」
「自分が本艦の艦長になる直前ですから、五年前

ですか。あれが二〇年ぶりの大改装で、エンジンをハイブリッド推進から核融合に。主砲と副砲をレールガンに載せ替えた。三年がかりの大改装でした」

「提督、大佐。そういう説明では、皆さんがよい混乱するだけでしよう」

そこで宮本博士が口を挟んだ。

「ああ、そうだな。ここは専門家に任せるとしよう。博士から説明してくれ」

宮本博士は、年の頃五〇歳前後のようだが、どうにかすると、三〇歳代に見えなくもなかった。

「まず、われわれはタイムトラベラーではありません。皆さんとは、別の世界に生きています。つまり、並行世界です。パラレル・ワールド——無限にあるパラレル・ワールドのうちの一つから来ました。この時代の、惨めな日本を救うために」

四人のゲストは、それを信じる信じないは別と

して、そういう話だろうと覚悟していたので「パラレル・ワールド」という突拍子もないフレーズを、ここでは素直に受け入れた。

「日本を救うために、中国との間に戦争を起こすのですか？」

「自分は理論物理学者です。人を殺して歴史を変えることには反対だが、私は顧問に過ぎず、大日本帝国としての判断が優先されました。ちなみに、皆さんの世界での、戦前までの歴史は、我々の世界の歴史と流れは全く同じなのです。こちらの世界でも、日本は満州に出ていきましたし、国民党軍と戦いもした。けれど、日米戦争はぎりぎりのところまで回避され、日本の敗戦はなかった。戦艦 大和 が実戦に参加することもなく、大和型三番艦の 信濃 も空母転用はなく、戦艦として竣工し退役しました。年号も西暦でこちらと変わりなく、元号の変化も皆さんの世界と同じです。

大きく違うところは、太平洋戦争を回避できたこと。それにより、アメリカも日本も科学技術の振興に様々なリソースを割くことができ、科学技術の発達速度が皆さんの世界より、若干スピードアップされたことでしょう。われわれの世界では、原子力発電はすでに時代遅れ。赤道付近では、軌道エレベーターの建設がはじまっています」

「時間軸は同じなんだ。驚きだな……」と、フォイルナー博士が感心して言った。更に続いて質問する。

「その……何というか、ドアというか、こちら側への扉が開いたのは、偶然なのですか？」

「いえ。フォイルナー博士が日頃仰っているサード・ウェーブがきました。二〇年くらい前ですかね。一夜にして、量子力学が過去のものになった。サード・ウェーブの実験の過程で、偶然こちら側への入り口が開いたのです。われわれは『ポイド』

と呼んでいます。そのコントロールには、今でも苦労していますが……。今は、なんとか通り抜けられるようになりました」

「それで、四半世紀不況に沈むこちらの日本を不憫に思つて、中国との間に戦争を引き起こそうとしたのかしら？」

と司馬があげすけに聞いた。

「ああ、そうだ。なぜ君らは、あんな奴らと付き合うんだ？ アカだぞ。それも、今やアカの本性を現して、世界中に害悪を振りまいている！」

伊地知が詰るように言うが、それに対して司馬は冷静に応えた。

「理由は、強いて言えば、われわれは戦争を望まないからです。核戦争はもとより、通常戦争も。われわれの世界は、貿易で深く繋がっています」
「共産主義者に魂たましいを売つてまで、金儲けがしたいのか？」

「有り体に言えば、そういうことですね。札東に、色は付いていない。戦争より、金儲けの方がマシでしょう？　そもそも、皆さんがここでやりになっていることは、ある種の内政干渉かんしやうです。こちらに存在しない技術を持ち込んで、戦争をするなんて」

「それは衝撃的な発言だな。大和撫子やまとなでしこの貴女から、そんな発言を聞くなんて」

「私、遺伝子的には中国というか、ウイグル族ですの」

「なら、なおさらだろう。中国に支配されている者なら、その苦しみから一日も早く解放されたいはずだ。ますます理解ができません！」

「ちよつと待ってください」と、ここで羅門が口を挟む。

「話を戻したいのですが、つまり、そちら側の、今も続いているという大日本帝国は、中国をやり

込めるために、こちら側での戦争を画策したわけですね？」

「そういうことになるな。正直、ミスチーフ礁を更地にした段階で、すぐさま戦争になると踏んでいたのだが……。日本戦隊に向かってきたミサイルを迎撃したのは、間違いだったようだ。君らの艦隊が火だるまになるのを、黙って見過ごすのが忍びなくてね」

「中国は核兵器を持つている。それを余すことなく、全て無能力化できますか？」

「われわれの技術なら、できないことはない」

「仮に、それで中国共産党が倒れたとして、ではその後にくる大混乱を、どう治めればいいのか？　内陸の少数民族は独立運動を起こすだろうし、景気の良い沿岸部だって、独立しようとするでしょう」

「好きにさせておけばいいさ。中国が弱体化する

分には、世界も大歓迎だろう」

「そんな単純な問題ではありません！ 皆さんは火を点けてあちら側に帰ればいいだけです、われわれは、そうはいきません。後始末に、何十年もかかることになる」

「アカどもを野放しにしたツケを、払うまでだろう。天安門事件てんあんもんの直後、あのまま締め上げておけばよかったのだ」

「われわれは皆、政治家ではありませんが、仮にそうだとしても、乱暴すぎませんか？ この世界の住人が、それを行うならともかく」

「君らが行動を起こさないから、われわれが手を貸してやった」

「……羅門先生、そのことは十分に議論しました。われわれの世界にも、内政不干渉の原則はあります。私は反対したが、聞き入れられなかったのです」

宮本博士が申し訳なさそうな顔で言う。

「われわれに、拒否権はあるのですか？」

「ない！ そんなものがあれば、われわれは最初から行動していない!!」

「それは、どのレベルの決定なのですか？ 大本

営とか、政府とか、枢密院すうみつゐんとか……」

「政府レベルの決定だ。こちらは、未だに大日本帝国が存続している。貴族院議員きぞくいんも形だけは残っているが、日本もだいたい民主化したよ。皇族こうぞくは平民へいみんとご結婚けっこんなさるし、不敬罪ふけいざいもなくなった。特高警察も存在はするが、昔ほどしたい放題ではない。とはいえ、事はあまりにも重大だ。われわれがパラレル・ワールドの扉を開いたことはトップ・シークレットで、今回の事態についても、政府のトップしか知らない。国防委員会のメンバーのみだ。おそらく、官僚を含め三〇人といないだろう」

「理解できない！ 皆さんは、こちら側より遙か

に進んだ軍事技術をもっているのに、戦争を嗾け
るだけで、自ら共産主義者を滅ぼそうとはしない。
失礼を承知で言いますが、無責任ですよね!」

羅門准教授は、まるで挑発ちようはつしているかのよう
な物言いと言った。

それに対し、伊地知大佐がため息を漏らす。し
ばらく、重い沈黙しんもくが流れた。

「……だから、まあ、われわれは最初、黒子に徹
するつもりでいたんだ。これがわれわれの世界で
起こっていけば、とつくに開戦しているのに、な
ぜかあなたたちの世界は平和志向だ。異常なまで
に、臆病おくびようで——」

「私たちは、太平洋戦争を経験しました! 国土
を焼け野原にし、原爆の惨禍さんかも経験した。だから、
紛争を軍力で解決する手段は放棄ほうきしたのです」

「それは、アカどもをのさばらせることへの、正
当な理由になるのかね?」

「民族自決権があります。それは中国人が決めれ
ばいいでしょう。確かに南沙を巡る中国の行動は
横暴おうぼう極まりないが、第三次世界大戦の引き金を引
いてまで、阻止そしするような話ではない。たかが無
人島の、分捕り合戦です」

伊地知大佐は、ハッチ際のインターカムの下に
座って速記を取る神楽伍長を見遣った。そして
「すまんが、次席参謀に、急ぎ出頭しろと命じて
くれ」と告げると、羅門やフォイルナー博士らに
向きなおる。

「もちろん、君らが拒否する事態も想定はしてい
た。可能性としては、一〇パーセントくらいだな。
日米が反撃もせず、アカどもも珍めづらしく自制心を発
揮して戦争にならない状況も考慮はしたわけだが
……。君らも君らなら、アカもアカだ。兵士を何
千人も殺され、軍艦を何隻も撃沈されたのに、な
んで自制するんだ?」

「彼らだつて、全面核戦争になることを恐れているからです。当然の懸念です。それは、皆さんから見れば、こちら側の世界は、剃刀の刃の上を渡っているような危なっかしい状況に見えるかもしれない。しかし、それなりに危機回避システムが機能して、指導者たちは抑制的に動いています」

「ここ数年の南沙では、そうは見えなかった。その前の尖閣せんかくでも、未だに領海侵犯が続いている。あんなふざけた真似まねは、わが大日本帝国海軍では決して座視しない」

「はあ、そうですか……」

しばらくすると、まだ若く背の高い中佐が入ってきて、伊地知大佐の隣に腰を下ろす。

「私の部下の金主キムチヨウ永中佐だ。……中佐、貴様が言った通りの展開になったよ。どうしたものかな」

「ですから申し上げたのです。相手側の同意もなく、他国の内政外交に口出しするのは、乱暴で、

絶対にもうまくいかない」と

金中佐は、いわんこつちやない、という顔で応じた。

「何か、策を出せ！」

「私ですか？ この会議から締め出して……」

「意見なら、後で聞く。参謀としてのアイディアを出せ」

「無くはありません。ベストとは言えませんが、一応の目的は果たせるでしょう。……申し訳ありません。ご覧のように、軍人というのは実に単細胞な連中でした——」

金中佐がこちら側に語りかけると、山本提督がうんざりした顔で「中佐、そこまでだ。われわれが君の進言を黙殺してきたことは詫わびるが、こちら側に意見の相違があったかのように振る舞うのは、間違まちがった行動だぞ」と窘たじなめる。

「失礼しました、提督。ここまでとします。自分
 はただ、出す必要の無かつた犠牲が、解決を困難
 にする現実を指摘したまでです。現代中国のよう
 な国家体制の下では、兵士もまた共産主義の奴隷
 なのです。彼らに、罪はない。まず、われわれ
 の目的を明確にしましょう。究極的には、われわ
 れの目的は同じだ。中国を支配する共産主義体制
 を打倒し、民主主義を普及させること、です。そ
 れは、そちら側も同じだと思えますが？」

「手段によるね。確かに、中国は民主化されるべ
 きだが、それは海外からの圧力ではなく、国内か
 らの自然な民衆の発露はつろによつてなされるべきだ」
 とフォイルナー博士。

「しかし、われわれがその切っ掛けを与えても、
 罪にはならないでしょう。いずれにしても、それ
 には時間がかかります。この作戦——オーケ
 ストラ作戦は、それを三日や一週間でやつての

けようという、無茶なものでした。しかし、当面
 の目的は、中国の拡張主義を阻止し、ここ南沙
 から追い払うことです。そこに限定すべきなので
 す。そして、これは達成されつつある。われわれ
 は、圧倒的な軍事力で中国軍を壊滅させ、パグア
 サ島では、海軍陸戦隊が敵の前に姿を見せて、警
 告も与えた。そこをもう一押ししましょう」

金中佐は、テーブルの下からタブレット端末を
 起こしてタッチペンを手にする。すると、純白の
 テーブルクロスが掛けられたテーブルの上に、五
 ○インチ・サイズのホログラム・スクリーンが浮
 かび上がった。

それに、状況指示盤が映し出される。

「南海艦隊旗艦はまだ、スピ礁沖に留まっていま
 す。夜明けを待ち、ステルス化した大和で近
 付き、この威容を彼らに見せつけてやりましょう。
 攻撃を受ける心配はない。必要なら、こちらの

兵器で、あちらの砲の一つも吹き飛ばして脅せばいいんです。同時に本艦からヘリを發進させ、向こうの司令官なり参謀を拾って、日本艦隊へと向かいます。そこで、各国の武官らがいる前で、中国側と協議をします。南沙からの撤退に関して

「そんなことをしたら、中国がとる手段は二つだ。あらん限りの核兵器をこの『大和』目掛けて撃ち込むか、逆に何百万もの兵士を送り込んで、この船を奪取し、その最新技術の独占を企むか」
 フォイルナー博士が中佐の発言を遮った。

「その可能性もあります。ですが、どちらに対処は可能です。もちろん、こちらもタダで従えと言う気はありません。われらの最新技術を、いくらかお分けしましょう。こちら側の世界へ」

「最新技術？ サード・ウェーブ理論とか、不老不死の秘薬とか？」

「まあ、癌の特効薬くらいはいいんじゃないか？」

伊地知が提案した。

「癌が撲滅されたところで、平均寿命はほんの四、五歳延びただけだったかな。あと、糖尿病の特効薬も一緒にくれてやればいい。透析患者が減れば、医療費の節約に繋がるだろう。だが、アランチ・エイジングはやめた方がいいな。九〇歳の爺さんたちが、わんさとフルマラソンに出て、東京帝大受験に殺到し、年金も大学教育も、一回破綻しかけたから」

「中国政府がそれを歓迎するかどうかは、疑問だわ。今ですら少子高齢化は大問題なのに、お年寄りが死ななくなったら、頭痛の種が増える。しかも、文革時代の暗い記憶を持つ世代が長生きするとなると……」

司馬が、感心しないという顔付きで言う。

「しかし、それは割に合わないんじゃないのかね？ わざわざ危険を冒してこちら側に来たのに、こんな無人島地帯から中国を追い払う程度では、君たちの労力に釣り合わないのでは」

「全くその通りです、フォイルナー博士。だからこそ、連合戦隊としては、次席参謀の意見は却下せざるを得なかった」

「……とは言っても、核戦争を起こして、こちらの人類社会を絶滅させるのが目的ではない。こゝは、合理的に行動すべきです。まずは、中国に、われわれの存在を誇示することが最優先でしょう」

「中国側は、乗ってくると思うかね？」

これまで黙っていた山本提督が、司馬に尋ねた。「今まで払った犠牲が、あまりにも甚大です。それに中国に限ったことではありませんが、国家というのは、面子を潰されることを嫌う。脅した

後にニンジンをおぼら下げる程度のこと、彼らの行動をコントロールできれば、苦勞はありませぬ。しかし、核戦争を阻止するということでしたら、彼らの前に正体を晒すのは、いいことでしよう。少なくともこの乱暴な殺戮行為が、アメリカやフィリピンによるものでないことは、証明できるはずですよ」

「共產主義者と交渉する気はないが、彼らに反省させるチャンスくらいは与えてやろうじゃないか。間もなく夜明けだ。敵の旗艦の真横に、こいつをぶち当ててやろう。では、後は話が合う者同士でやってくれ」

その言葉を最後に、山本、伊地知、田中艦長が腰を上げて出ていった。後には、金中佐と宮本博士、そしてお目付役らしい神楽伍長が残る。

ハッチが閉まって全員が再び着席すると、ずっと無言だった姜三佐が、痺れを切らしたように口

を開いた。

「失礼ですが、金中佐は、ご出身は半島ですか？」

「ええ、ああ、そうか。姜三佐は、朝鮮人だったね」

「韓国かんこくです。ああ、いえ、韓国というのはですね——」

「知っている。こちらの歴史も、少しは学んだから。こちら側で、わが民族を襲った悲劇は、何とも形容しがたい。どうして世界は、北朝鮮きたちょうせんを黙認するのですか？」

「率直に言えば、韓国が、北の体制の崩壊を望まないからです。二千万からの難民が、着の身着のまままで殺到する——」

「すみません、司馬さん。北の話はどうでもいいですから」

姜が口を出すなと遮って、自分の疑問を金中佐にぶつけた。

「あちらの世界で、朝鮮は、今でも日本の植民地しよみんちなのですか？」

「ああ、君の心配はそつちか。違う、独立したよ。一九六〇年代に、独立運動が盛んになってね。日本側は軍を投入して抑えもしたが、学生が決起する光州事件こうしゅうじけんというのがわれわれの世界でもあったんだ。ただし、発生は一九六八年。それで、日本側でも朝鮮独立を支持する気運が高まり、まあ、植民地経営としてはうまく運んだ方だから、この後は独立させて好きにさせた方がいいだろうという判断になったんだ。それで翌年、独立したよ。しばらくは反日の気運もあったけれど、朝鮮でも北の方で、いろいろあつてね、その後、日本とは相互防衛条約を結び、帝国陸軍の一個旅団が、鴨緑江りょくじやう沿いに配備されている。それで今も、日本の大学や士官学校には第三国人わが枠があつて、われわれ朝鮮人と台湾人たいわんじんで占められているんだ」

「貴方は、どうして日本軍に？」

その質問に対し、金中佐は困った顔をした。

「いや、こちら側の日朝というか、日韓関係に関して少し勉強したけれど、なんで君らの世界ではあそこまでいがみ合っているのか、さっぱりわからないんだ。僕らの世界の朝鮮は、日本語は小学校からの必修だし、一番成績の良い者は、日本企業に就職する。軍も同様で、士官学校から日本人としてキャリアを積み、どこかで母国の軍や企業からお呼びがかかって、より良い仕事に就けるんだ」

「それではまるで、植民地と変わらないじゃないですか！」

姜の強い口調に、金は参ったという顔で苦笑する。

「……いや、国粹主義な連中があつちにもいてさ。今の日朝関係は、植民地時代と何ら変わらない

い、真に独立すべきだ！と主張しているよ。それに対しては、一定の支持者はいるが、そう広く支持されているとは言いがたい。私は朝鮮国籍のまま、日本海軍に奉職した。君だって、今は日本人なんだろう？」

「それは……たまたま所帯を持った相手が、日本人だったからです」

「正直、国粹主義に気触れた時期もあつたが、こちらの祖国の惨状を見て、われわれはつくづく幸運だつたと思つているよ。人口はようやく一億を超えた。日本の国内人口は、今、二億かな。その他に、アジア各国に四千万ほどが移民やら何やらで出ているが」

「樺太は、日本領ですか？ あと、パラオとかは？」

と羅門が聞く。

「南樺太は、まだ日本領です。ソヴィエトという

いろあつたが、守り抜いた。だから、あちら側では『北方領土』という言葉は、存在しません。グアム、サイパン、パラオは、今でも日本の信託統治領です。毎年、大勢の観光客がダイビングを楽しみに行く。南沙諸島は日本領だが、何しろ領有権問題が発生しなかつたせいで、どこも無人のままです。アメリカは七〇年代にフィリピンから手を引いて、日本資本が入るようになったが、発展度に関して言えば、こちら側のフィリピンとたいして変わらないでしょう。ベトナム戦争もありました。その際、日本は沖縄の基地をアメリカに貸したが、こちら側とほぼ同じ展開を辿って、米軍は敗退した」

「第二次世界大戦は、あつたのですか?」

「ヨーロッパでは起こりました。ヒットラーもナチスも現れ、ホロコーストも起こった。でも、日独伊三国同盟はこちら側では成立しなかつた。そ

れもあつて、太平洋は静かなものでした。チャーチルに唆され、アメリカはヨーロッパ戦線に参加し、最後はミュンヘンとドレスデンの二箇所を原爆を落として戦争は終結した。それ以来、世界大戦は起こらなかつた。日本は、大凡の国際紛争で中立に徹し、ある時は調停役として奮闘し、国際連合の常任理事国として、確固たる地位を築いた。八紘一宇のスローガンのもと、アジアの経済発展に尽くし、今やこのエリアは世界経済を牽引する、最大の成長セクターとなつた」

「まるで、こちら側の歴史をなぞって、日本が失敗した部分を全て修正し、黒歴史をバラ色に描き直したみたいだ」

羅門が皮肉げに笑う。

「全くです。ですから、ボイドが開いて、こちら側の歴史を知った時には驚愕しました。何というか、歴史という迷路を作って進んで行くと、先

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。